

中産階級への、はるかな道

てっぺんまで吹き抜けになったデパート。一階フロアのまん中に、巨大なキューピー人形が立っていた。

夢じゃなからうかと、眼を円くしている僕のそでを引いて、彼女はせかす。

「こつちよ。……早く」

それにしても、ずいぶん巨きな人形だ。そう、六メートルはある。誰が何のためにこんな無気味なモノを運びこんだのか。

ピザハットへと急ぐウエウを待たせて覗いてみたら、……なんてことない、おなじみの日本のマヨネーズ・メーカーの宣伝だ。見慣れたパッケージが山積みになされて、客を待っている。

複雑怪奇にもつれあつた階段で二階にあがると、そのキューピーに正面から睨まれてしまった。

バンコクのショッピングモールはエネルギーに満ちあふれた迷宮だ。

マヨネーズだけじゃない。資本主義が生み出したあらゆる商品と、それすらうわまわる欲望とが渦巻いてござ

たがえす。

「ねえ、これ。ニホンゴの勉強するの」

通路にまで並んだ売店。日本語教則本に眼を輝かせて、彼女は言うのだ。

彼女の名前は「ウエウ」。

……赤ん坊のころ、まるで盛りのついた猫みたいにいちんち泣いてたから。ウエウってのは、だから、猫の鳴き声のことなの。

アダ名の由来をたずねたら、恥ずかしそうに頬を染めて、彼女はそう語った。

「次にアナタが来たら、きっとニホンゴでお話できるわ」

つたないのはお互いさまで、もどかしい英語のやりとり。期待に輝く表情でウエウはつぶやいている。

買ったばかりの教則本。

でも、それは誤植と間違いだらけのいいかげんなものだ。ぱらぱらとめくっただけで僕は呆れてしまった。

けど、だいじょうぶだろう。来週から彼女は日本政府お墨つきのマトモな日本語学校に通うことになっているから。

「そうだよ、しっかり勉強しなきゃ」

ひどく混んだピザハットの店内。日本と変わらない味のピザをばくつきながら、僕は答えるのだ。

バンコクは、ただならぬ日本ブームだ。

それは、日本の流行歌が流行ったり、日本のアイドルが人気になる……というレベルの問題じゃない。

そごう、大丸、三越、そして新しくできるヤオハン。

セブンイレブンだってあるし、ウエウとの待合せはいつもマクドナルドだ。スカイラークがレストラン・チェーンを出すなんて情報も聞こえてくる。

そればかりか、現地人向けの『和食』ファミリー・レストランなんてシロモノもある。

昔からある日本人向けの店は高すぎる。

そこで、頭のいいチャイニーズが考えた商売が、日本人を相手にしない『和食』レストランというわけだ。

ウエウに誘われて行ってはみたものの、日本人らしき客は僕だけ。ちよつとばかり生活に余裕のできた、勤め人の家族たち、評判のテンプラ、スキヤキにトライしようというんで満員だった。

味噌汁もオシンコも食えないくせに、彼らは和食を口にしたがる。

まるで、……それは日本人になりたがっているかのよ

うだ。

「オハヨウ、コニチワ、コンバンワ」

たどたどしくテキストを読んで、照れ臭そうに笑ってみせるウエウ。

「ふう、難しい、日本語、すごく難しいわ」

帰省からずっと、僕たちは二人で過ごしていた。

九階建ての白いマンション。こざっぱりしたそのワンルームに転がりこんで、ホテルに戻るのとは寝るときだけでも、だからって二人の間に何か起きたわけじゃない。タクシーの運転手にも、土産物屋の主人にも、聞かれる。……… いったいどこで知りあったんだ？ と。

嫉妬まじりの羨望のまなざしを浴びるのは悪い気分じゃないし、美人を連れ歩くっていうのは快感だから、ね。

わずか三日間の帰省。失業したウエウだけど大学の授業がある。それに彼女は日本語学校にもかよふことになっているのだ。

バンコクの女の子がみんなそうであるように、ウエウもまた、向上心にあふれたしっかり者だ。

口癖のように「バンコクは嫌い、みんな金儲けばかり

考えて。悪いヒトいっぱい』なんてボヤいていたくせに、短い帰省ですっかり元気になった。

商品と欲望と人間があふれたバンコク。どこからか集まってきた女の子たちみんな、田舎を恋しがりながら暮らしているのだ。

ランパーンは、いい町だ。

北部の中心チェンマイから少しばかり離れて、観光客なんかだれも行かない静かな町。そのくせ日が暮れかかると、街には馬車が出没するのだ。

水銀灯が照らした庭を眺めながら生演奏を聞く洒落たレストラン。夕食をすませてから、僕たちはその馬車で目的もなく町をまわった。川つぶちの絶壁にしがみつくようにして建つライブハウスで、滔々と流れる川面を眺めながらカーペンターズの弾き語りを聞いて、アイスクリームとビールを頼んだ。

発電所に勤務する、実直な技術屋の父親、……なにせ外国人の僕を前にして緊張のあまりブルブル震えていたほどだ。それにやっぱり電気関係の専門学校を卒業して、近所の変電所に勤める兄。

ウエウが憧れているホンダ・アコードはなくても、ヤマハの新車のバイクはあるし、毎晩ビールを飲んでビリ

ヤードに専念する兄にはしつかり者の看護婦の婚約者がいるし。

マクドナルドへの道すがら、僕はずっと考えていたのだ。

タクシーを使わずあてもなく歩きまわり、ライカを片手にスナックを撮りながら。

熱帯の陽射しを浴びながら歩きまわっているうちに、市場に出たりした。

花屋には鮮やかなピンクのデンドロビウムが積みまれ、濃厚な香りを撒きちらす。

魚屋、総菜屋、八百屋、海賊版のミュージック・テープを売る露店、台湾製のラジカセを売る電気ショップ……。

どこかひとなつっこい街の、けれど、僕は異邦人だ。それも、もう日本に帰らなくてはならない。金がなくならないうちに、次の仕事の予定が来てしまった。

いや、バンコクでは、誰もが異邦人だ。世界中どの大都市でもそうであるように。

みんな、何かに吸い寄せられるようにして都会にやってくる。好景気と建築ブームに湧きかえり、トーキョーみたいに変貌を遂げつつあるバンコクはなおさらだ。

「ウエウ、……東京に行ってみたいかい？」

聞くまでもないような愚問。

「うん、ニホンゴがじょうずになったら、行ってみたい」
「でも、気をつけろよ。……日本で働かせてやる、なんてウマイコト言っただマすヤツがいるから」

インチキ旅行屋のスミットのことを話して聞かせてやった。ヤツは、料理屋でも飲み屋でも、やたら女に声をかけてまわっている。とてもウエウには引き合わせられない。

……日本に観光に行かないか？ なに、タダでいいんだ。ビザが有効な二週間、働くだけで百万円も稼げるんだから。

まるで、日本が天国であるかのように誤解している娘たちがいることも、確かだ。

肉体を切り売りさせられるんだと、薄々、感づきながらも娘たちはダマされる。

「わかっているわ。それに東京はバンコクより騒々しくて、狭くって、物価が高くて住みにくいんでしょ？ そんなのまっぴら」

忠告するまでもなく、彼女は慎重で利口な娘だ。優しく微笑んでくれた。

「本当の観光だったら行ってみたいけど。トーキョー・デイズニールランドでしょ、ハラジユクでしょ」

まるで北海道の女子高生みたいなことを言って、ウエウは笑う。

はじめてナポレオンで出会った時の、あの不幸せそうな表情はすっかりなくなっているのだった。

僕は、ずっと考えていたのだ。

この街は、クルンテップ……天使の都という美しい名を持つバンコクは、どこに行こうとしているのか。

「わあ、どしゃ降り」

どうも入口に群衆が固まっていると思ったら、いつしかスコールが街を襲っていた。

出るに出られず、みんな雨宿り。どうせすぐに止んでしまふに違いないのだ。

「見て歩こうよ。デパートの中を」

僕はそう提案した。

そごうや大丸だったら、ウエウと見てまわったこともある。けれどここは現地系のショッピングモール、だいぶ印象が違う。

無秩序に並んだ店、店、店。

やっぱり彼女もバンコクの女の子だ。おしゃれが好きで、ファッションにはちよつとばかりウルさい。

でも、それは王室ご用達ディスクのダイアナに出入りする金持ちのお嬢さまや、マツサージ・パーラーの高級娼婦がそうであるような、例の逆毛ファッションじゃない。

ピンクのリップステイクだけのナチュラル・メイク、そっけないくらいに自然なウェービー・ヘアー、そしてごく地味な、白のブラウスと細かいプリント模様のスカート。

……そうか、こんなところで買っていたんだな。

熱心にウインドー・ショッピングに励む彼女を眺めていると、納得させられてしまう。それはサイアムセンターの日本製有名DCブランドでもないし、プラトウーナムの露店の安物でもない。

そのあいだくらいの、手頃な値段。

中産階級……なんて言葉が脳裏にチラツと浮かんだ。

大丸では借りてきた猫みたいだったウエウが、こんなに夢中になっている。

でも、……僕は知っている。

大丸デパート、オリエンタルのティールーム、シャングリラ・ホテルのダイナー。初めてのデート、二人で歩きたまわった、天使の都クルンテップの華やかな晴れ舞台。ひどく脅えてしまい、一人ではトイレにも行けなかつた。たくせに、帰省したランパーンで自慢していたのを。

…… オリエンタルでお茶を飲んだの。知ってる？ 世界のホテルよ。それにシャングリラでも食事をしたの。タイ語は理解できなくても、固有名詞はわかるからね。頬を紅潮させて、家族に自慢していたウエウ。ひよつとして僕は罪なコトをしてしまったんだろうか。

果てしなく広いデパートをうろつきまわったあげく、もとの巨大キューピー人形のところまで戻ってしまった。もう雨は止んだだろうか。

いや、まだだ。スコールはいつそう激しく路面を叩きつけている。しかたない、無気味きわまりないキューピーの足元に立って、せめて洪水が歩道から引くまで待つ。シヨツピングモールは、まるでノアの箱舟だった。意味のない笑みを浮かべたこのキューピー人形は、欲望と消費とを両手に天秤させた資本主義の守護神だ。

キューピーを守護神にしてシヨツピングモールは、いや天使の都、別名バンコクと呼ばれるこの街クルンテッ

プは、中産階級への、遠く果てしない途を漂流している。

……そんな、妄想。

買ったばかりのお気にいりの洋服。聞いたこともないブランドの名前が大きくプリントされた紙袋をだいじに抱えて、キスもさせてくれない僕のガールフレンドはどしゃ降りの雨を見つめている。